

経済人の書棚



評者 ● 小林喜光

三菱ケミカルホールディングス
取締役会長

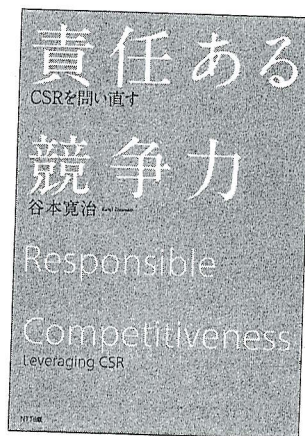
『責任ある競争力——CSRを問い直す』

谷本寛治著／NTT出版／本体2200円

良い企業とは何か。社会が企業に期待する役割や責任が変わりつつある今こそ、「横並び」ではなく、自らが考えなければならぬのだ。

CSRとは具体的に何だろうか

会社の力、価値を示す指標として、最近、日本では「ROE（株主資本利益率）」が注目を集めている。しかし、「それだけで会社の本当の価値や力は分からない」というのが私の持論だ。「イノベーション創出への貢献」や、



「環境問題などへの責任ある対応」企業としての「社会性」も踏まえ、考える必要がある。と言いつつ、「企業の社会的責任が分かりづらい」というの

が、世の人の率直な気持ちではなからうか。「CSR」という略称は浸透したけれども、具体的な中身を説明するのはやはり難しい。私自身、「分かりやすく説明して」となると、さて……と先に思案をしてしまう。

まず、社会そのものが、ますます複雑怪奇化していて、捉えどころがない。「モノのインターネット」(IoT)の拡大拡散により、ありとあらゆるものが好きなように、そしていとも簡単にコミュニケーション(ある種の社会?)を形成できるようになった。その中に身を

置く企業に「責任」があるとして、一体どのような社会を対象に、どのような責任を考えればよいのか、ピンとこない。本書もMSP（マルチステイクホルダー・プロセス）にきちんと触れているが、「もし、人工知能(AI)を搭載したロボットも、今後ステイクホルダーの一つになり得るとしたら……」などと余計なことを考えてしま

うと、話がこんがらがるのだ。だったら「取り敢えず横並び」と左右を見てしまうのが、日本企業をよくないところかもしれない。しかも、横目で見たら見えてくると、CSRの実態はますます見えなくなる。「責任」を持つ企業が具体的に何かをするとして

も、見よう見まねは結局、初来日の外国人が蕎麦屋で箸を手にするのと同じなのである。

負荷を軽減してくれる

そんな、CSRという箸がまだ使えない日本の企業人にピッタリなのが、

本書だと思う。時系列的にも、横断的にも、見るべきところにきちんと目が向けられ、要点を押さえると同時に分析が加えられている。左右の企業に、どのようなことがどこまでできているかについても、しっかり把握し、紹介してくれている。

CSRの観点でも、サステナビリティという側面でも世界の最先端にある欧州で、「企業にかかる負荷」に関する議論がさかんになされているけれども、本書は間違いなく「最初にかかる負荷を軽減してくれる」と言ってもいい。真面目で堅く、しかも簡単には馴染めないCSRについて書かれているにもかかわらず、読み出すと数時間で読了できてしまう。勿論、日ごろからCSRについてちゃんと考えている必要があるけれども、それまでモヤモヤしていたことや、ぼんやりとしか見えていなかったことの一つ一つが、頭の中で居場所を見つけ、「納得」という形で落ち着いていく感があるのだ。

そしてさらに、そこで得た知見とインスピレーションをどう生かすかは「あなたの責任なんだぞ」という気持ちにもさせてくれる。短期視点で利益を最優先に考える傾向を、社会のせいにはかりすぎではない。まずは企業が、社会に、「この会社の株主となつて、末永くその成長を見守りたい」と思わせるべきなのだ。

激変し、目覚ましい進化を遂げる社会と企業、そしてその二つのあるべき関係(CSRもまさに発展途上にある、と言うべきだ)を、このような形でアカデミアがまず、しっかりと整理整頓してくれるのは本当に有難いことだ。一つの「理想的な産学連携のあり方」が、ここでも実現すると考えてよいのではないだろうか。

こばやしよしみつ 一九四六年山梨県生まれ。東京大学大学院理学系修士課程修了。ヘブライ大学、ピサ大学留学後、三菱化成工業(現・三菱化学)入社。二〇〇七年三菱ケミカルホールディングス社長、一五年四月より現職。経済同友会代表幹事。理学博士。

本欄はリチャード・クラス、小林喜光、斎藤淳の三氏が交代で執筆します